

道



きむ そんうん

1963年、大阪市鶴橋生まれ。大学卒業後、リクルート勤務などを経てフリーで映像制作に従事。在日1世の女性を追った『花はんめ』や、毎日映画ドキュメンタリー映画賞を受賞した『SAYAMA みえない手錠をはずすまで』、『袴田巖 夢の間の世の中』などのドキュメンタリー映画を監督。最新作『獄友』は今年3月から上映を開始し、全国各地で自主上映会などの取り組みが広がっている。主題歌「真実・事実・現実 あることないこと」は詩人・谷川俊太郎が寄せた詩にフォーク歌手・小室等が作曲し、総勢27人ものミュージシャンがレコーディングに協力。「冤罪音楽プロジェクトイノセンス」として、ライブイベントが行われるなど、映画を超えて幅広いジャンルから賛同を得ている。

組織の論理に対する無自覚が生み出す過ち

映画監督
金 聖雄

冤罪^{えんざい}を訴えて闘う男たちの姿を捉えたドキュメンタリー映画『獄友^{ごくとも}』は思いがけない出会いから生まれました。ここに登場する5人のうち3人は無罪を勝ち取りましたが、狭山事件の石川一雄さん、袴田事件の袴田巖さんは、それぞれ約31年半、48年もの獄中生活を終えながら、今も無罪が認められない状態が続いています。

もともと、冤罪について特段の関心があったわけではありません。たまたま依頼された仕事で石川さんを撮ることになり、耐えがたい苦痛を味わっているはずなのに、なぜ絶望に陥らないでいられるのかと思ったのがきっかけです。石川さん夫婦を撮影するようになって、袴田さん、布川事件の桜井昌司さんと杉山卓男さん、足利事件の菅家利和さんとも出会うことになりました。実に個性豊かな5人組で、あたかも誰かがキャスティングしたかのような奇跡的な組み合わせ。獄中という特殊な環境で育んだ友情に強い絆を感じ、その素顔に迫りたいと思ったのです。

桜井さんは、不良少年だったのが災いし、いわれの無い罪を着せられたにもかかわらず、前向きな気持ちを失わずに29年間、獄中で過ごしてきたそうです。また、袴田さんは自分の世界に閉じこもって、過酷な現実を乗り越えてきました。そうした姿に接して、どこまでが幸で、どこから不幸なのかという明確な線引きがあるのではなく、どんなつらい出来事があっても、人間はその時、その状況のなかで、生き方を引き受けて生きていくしかないのだと考えさせられました。とはいえ、そんな桜井さんも無罪が確定したときは心の重荷が取れたといえます。

6月には袴田さんの高裁決定があり、「耐え難いほど正義に反する」とまで指摘して拘置を停止した静岡地裁の再審開始決定が覆されてしまいました。新しいDNA鑑定結果が出ているのに、再審を不要とする判断は理解できません。こうした決定に関わる一人ひとりには誠実な人物だとしても、自らが組み込まれているシステムに疑問を感じることもなく、ただ組織の論理に忠実に行動してきたがために大きな過ちを犯してしまうこともあると思います。冤罪は誰にでも起こり得ることで、医療関係者も無関係ではありません。逆に、組織の論理のなかで自分自身が加害者側になってしまう可能性もあります。日本に生きる私たち一人ひとりが、おかしいと感じたことに声を上げずにきたこと、そのささいな積み重ねが冤罪問題としてあらわれているような気がします。今、国会で問題になっている公文書改ざんについても同じことが言えるのではないのでしょうか(談)。